



葉書二枚の重み

伊達公子

高校時代から寮生活でしたので、両親との会話は電話が頼り。でも、当時の寮には公衆電話が二台しかありません。電話をかける時間はだいたい決まっていますから、みんながその電話に殺到します。並ばなければならぬし、後ろで待つことになると長話はできません……。

その中で、どうしても細かい話は手紙でということになります。それが私と紙との親密なおつき合いの始まり。以来、手紙が私にとって大切な存在になりました。

特に「コチからはよく手紙をもらいましたね。試合直前はとても気分のアップダウンが激しかったので、あまり人と口をききたくなくなります。そんな私の性格を知っているの、言葉ではなく手紙でアドバイスしてくれました。内容は、そのときにあつて違いましたが、格言

が好きな「コチがいて、私が勝ち続けていたときに、「好事魔多し」と行だけ書いてある手紙をもらったことでもあります。

試合前のヒリヒリした状態のときは、言葉より紙に書いた文字のほうが、素直に心の中に入って来るものなのです。ですから私は今でも手紙派。電話やメールなども使いますが紙に書いた文字のほうが心が伝わるように思えます。お礼をするときでも、電話本よりもなるべく葉書で、心がけています。

今までで最も印象に残っている手紙は、引退したときにある「コチからいただいたものです。引退を発表したときはとてもたくさんの方から「やめないで」とか「まだ頑張って」という励ましの手紙や電話をいただきました。その中でただ一人、高校時代からずっと教えていただいていた「コチから、「良くやっだね」という内容の手紙が届いたのです。

引退は、私自身すごく悩んで結論を出しました。ずっと私のことを見ていてくれた方ですから、その結論に至るまでの心の葛藤を理解して、「今までよく頑張ったね」という意味を込めて「良くやっだね」という手紙をくださったので、その気持ちを感じられて、すごく

嬉しかったことを覚えています。

現在、カモン!キッズテニス」という三歳から十歳までの子供たちにテニスの楽しさを伝える活動をしています。現代の子供たちは室内遊びばかりで……と言われていますが、実際は体を動かすことが大好きなんです。特にJICA（国際協力機構）のオフィシャルサポーターとして、バングラデシュへ行ったときに出会った子供たちの目の輝きは忘れられません。

子供たちの嬉しそうなお姿を見ると、私が今までテニスからもらったものを少しでもだけ社会にお返しできたかもしれないと感じます。ですから、これからも多くの子供たちにテニスの楽しさを伝えていきたいと思っています。

キッズテニスに参加した子供たちから送られてくる、たくさんのお手紙や絵、嬉しさが素直に表現されているそれらの手紙は、私の元気の源です。そんな手紙を読むたびに、もっともっと多くの子供たちに、テニスの楽しさを伝えていきたいと思えます。



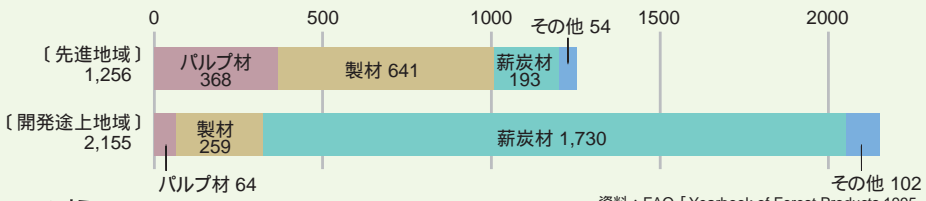
伊達公子(だて・きみこ) 1970年京都出身。高校卒業と同時にプロテニスプレーヤーに転向。95年にはWTAランキング4位まで上昇。96年引退。98年より「伊達公子とテニスであそぼ カモン!キッズテニス」を主催し、出会った子供は1万人以上になる。
<http://www.kimiko-date.com>

PAPER COLUMN Vol.8

熱帯地域の森はなぜ減っているのでしょうか?

森林の減少が問題になっています。深刻な森林減少は、開発途上地域、とりわけ熱帯地域で多く見られます。こうした地域では、伐採された木材の過半が燃料の薪や炭に利用されています。また、食糧確保のために、森林を焼いて畑や放牧地に変えているのも減少の理由の一つです。その背景には、人口の急増や食料不足等が挙げられます。日本の製紙産業は、熱帯地域から紙の原料となる木材を輸入していますが、その98%は植林された木材です。

地域別木材生産量(1995年) (単位:百万m³)



今回は1月1・8日号、山本寛齋さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo: Yohei Maruyama